

藤沢市で発見されたハクビシンのねぐらについて

松本丈人・浜口哲一

Taketo MATSUMOTO & Tetsuichi HAMAGUCHI: Notes on a Roost of Masked Palm Civet (*Paguma larvata*) Found in Fujisawa City

はじめに

ハクビシンは近年急速に神奈川県内で分布を広げている中形の哺乳類である。県内の記録をとりまとめた中村他(1989)は、日本のハクビシンを帰化種と判断し、神奈川県では現在増加期にあると推定している。同論文によると、相模川下流域では平塚市が分布の東限であるとされていたが、その後藤沢市、鎌倉市でも本種の生息が確認され(中村, 1990)、本種の分布は相模川以東の地域にも広がってきている。

筆者らは、藤沢市大庭においてハクビシンが生息しているという情報を入手し、そのねぐらを観察することができた。新しい分布地として、また生態に関する若干の知見について報告したい。この報告を行うにあたっては、生息の情報を提供し、現地を案内して下さった端山清氏、藤沢市みどり課の青木保氏、また調査に同行して下さった大屋親雄氏、梶真史氏、糞の分析を手伝って頂いた青木雄司氏、小菅敏裕氏、またハクビシンの分布や生態について御指導下さった神奈川県立博物館の中村一恵氏に感謝したい。

生息地の環境

ハクビシンが生息していることが明らかになったのは、藤沢市大庭の芙蓉カントリークラブに囲まれた神明社の社殿である。1989年5月に氏子の端山清氏らが、天井裏から獣の尿がしみているのに気づき、屋根裏に通じる穴をふさいで、藤沢市のみどり課に通報した。筆者らはその情報を得て、1989年6月26日に現地を調査し、ハクビシンがこの社をねぐらに使用していたことを確認した。

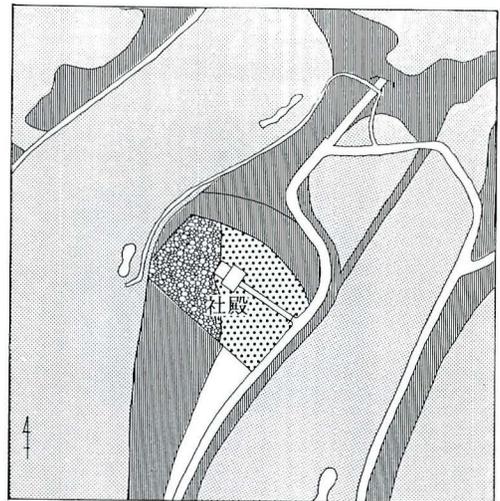
神明社は大庭部落の鎮守社で、カントリークラブ開設時に地域の信仰の対象として現状のまま保存された。社は標高62mの小さい丘の上であり、かつては境内に9本のクロマツの大木がそびえ、遠くからもよく目立ったという。現在は周辺をゴルフ場に囲まれた島状の小さな緑地として残っており、社の周囲はサクラ、ツバキなどの植栽された明るい樹林になっている。

また北西斜面は小面積のサワラ林になっており、その林床は下刈りをしていないので、タブノキ、ケヤキ、ヒサカキ、イヌビワ、アズマネザサなどが混生している(図1)。

社の建物は間口3間、奥行き2間、高さ3間半の拝殿と、間口2間、奥行き2間の本殿からなり、ねぐらが見つかったのは拝殿の屋根裏であった(図2)。

ねぐらの状況

観察のため拝殿の天井裏に入ったところ、全体の約3分の1の面積に中形哺乳類の糞がうず高く積もって



- シバ(ゴルフ場)
- クロマツ林(サクラなどの広葉樹を混植)
- サクラ・ヒサカキ・ツバキなどの植樹
- スギ・サワラ植林(タブノキ・ケヤキ・イヌビワ・ヒサカキ・アズマネザサなどが混生)

図1 生息地付近の環境

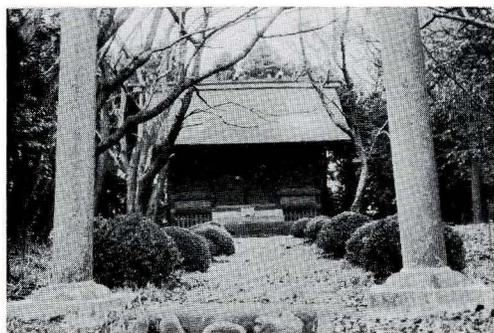


図2 神明社の社殿



図3 屋根裏のため糞

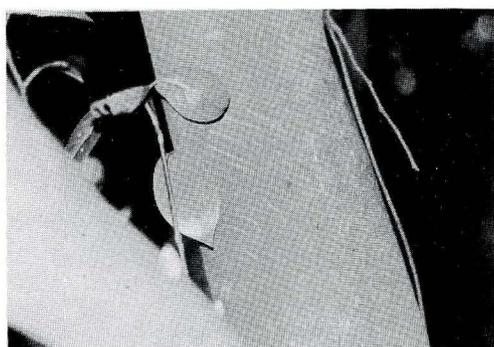


図4 ヤブツバキにつけられた爪痕

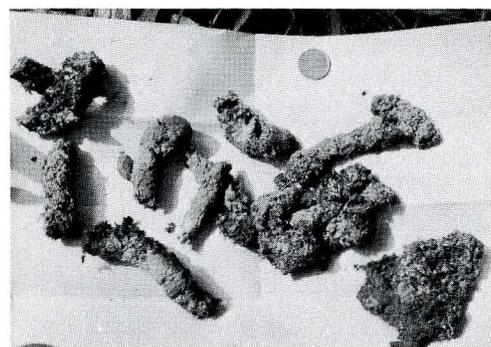


図5 糞 (中央上は十円玉)

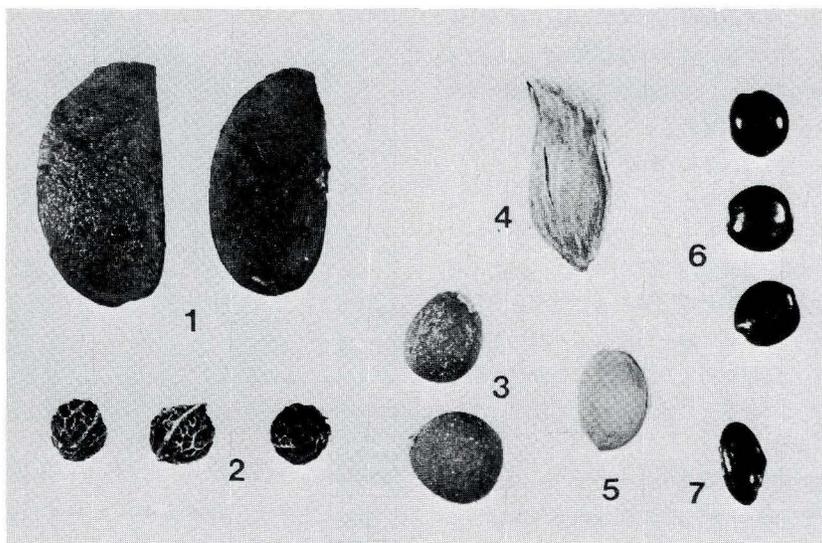


図6 検出された種子

- 1: カキノキ 2: エノキ 3: ムクノキ 4: ミカン属 5: サクラ属
6: ケンボナシ 7: アケビ属

表1 ハクビシンの糞から検出された内容物 (1989.6 藤沢市大庭)

	種名	検出部位	量	
●植物				
被子植物	エノキ	<i>Celtis sinensis</i>	種子 +++	
	イヌビワ	<i>Ficus erecta</i>	種子 +++	
	アケビ属	<i>Akebia</i> sp.	種子 +++	
	ヒサカキ	<i>Eurya japonica</i>	種子 +++	
	カキノキ	<i>Diospyros kaki</i>	種子 ++	
	ムクノキ	<i>Aphananthe aspera</i>	種子 ++	
	ケンボナシ	<i>Hovenia dulcis</i>	種子 ++	
	キウイフルーツ	<i>Actinidia chinensis</i>	種子 ++	
	ササ類	Bambusaceae sp.	葉 (注) ++	
	イネ科	Poaceae sp.	葉 ++	
	ミズキ	<i>Cornus controversa</i>	種子 +	
	サクラ属	<i>Prunus</i> sp.	種子 +	
	ミカン属	<i>Citrus</i> sp.	果皮、種子 +	
	ケヤキ	<i>Zelkova serrata</i>	葉 +	
	裸子植物	クロマツ	<i>Pinus thunbergii</i>	葉 (注) ++
		スギ	<i>Crypomeria japonica</i>	葉 +
サワラ		<i>Chamaecyparis pisifera</i>	葉 +	
●動物				
昆虫類	アオオサムシ	<i>Carabus insulicola</i>	上翅、脚他 +++	
	オオヒラタシデムシ	<i>Eusilpha japonica</i>	上翅、前胸 ++	
	大形ゴミムシ類	Carabidae sp.	上翅 ++	
	マイマイカブリ	<i>Damaster blaptoides</i>	頭部 +	
	クロヘリアトキリゴミムシ	<i>Parena nigrolineata</i>	上翅 +	
	コクロコガネ	<i>Holotrichia picea</i>	上翅 +	
	マメコガネ	<i>Popillia japonica</i>	上翅 +	
	ドウガネブイブイ	<i>Anomala cuprea</i>	上翅 +	
	クワガタ類	Lucanidae sp.	上翅 +	
	シロスジカミキリ	<i>Batocera lineolata</i>	脚 +	
	ウバタマムシ	<i>Chalcophora japonica</i>	前脚 +	
	マルカメムシ	<i>Coptosoma punctissimum</i>	腹部 +	
	ハラビロカマキリ	<i>Hierodula patellifera</i>	卵塊 +	
	カマキリ類	Mantidae sp.	前脚 +	
	コオロギ類	Gryllidae sp.	翅 +	
	ガ類	Lepidoptera sp.	幼虫の皮 +	
	甲殻類	サワガニ	<i>Geothelphusa dehaai</i>	脚、甲他 +++
	軟体動物	ミスジマイマイ	<i>Euhadra peliomphala</i>	殻 ++
		ヒダリマキマイマイ	<i>Euhadra quaesita</i>	殻 +
	鳥類	不明	羽、骨	++
	●人工物			
		タバコフィルター		+
		ビニール片		++

注：ササ類とクロマツの葉は2-5cmの長さに噛み切られている。

いた(図3)。糞の全体の量は計測していないが、厚さが10cm以上に達している所があり、かなり長期にわたって使用されていたねぐらではないかと考えられた。糞は直径約2cm、長さ5~8cm程度の大きさで、形状と大きさはタヌキのものとよく似ている。しかし、タヌキではこうした屋根裏にため糞をすることはまず考えられないこと、糞の中からハクビシンと推定される獣毛が検出されたこと、社の周囲の木の幹に5本指の爪痕が多数認められた(図4)ことでハクビシンのねぐらと判断した。

ねぐらへの出入りには、ひさしの下のはめ板のずれた穴4ヶ所を利用したものとらしく、内1ヶ所の穴は20cm×25cmの大きさだった。社の近くの樹木の幹には爪痕が見られ、建物に登る足場になっていたと思われる木もあった。

最初の発見後、社殿の保守を考えて、いったん出入口はふさかれたが、端山氏らのご好意で現在は再び出入りができる状態になっている。しかし、1989年12月に観察したところでは、その後使用されているようすは認められなかった。

糞から検出された内容物

発見された糞(図5)の一部を持ち帰り、水で洗って固形の内容物を検出した。量的な調査などは、まだ行っていないが、とりあえず同定できた生物等をリストアップし、ハクビシンの食性を知る一資料として紹介したい(表1)。なお、この他に未同定の資料が残されているが、それについては稿を改めて発表したい。

内容物で量的に多かったのは、植物の種子である(図6)。特にイヌビワ、アケビ属、カキノキ、ムクノキ、ケンボナンシ、キウイフルーツ、ミカン属など、甘味のある液果が大きな割合を占めているところにハクビシンの食性の傾向がよく現れていると考えられる。静岡県で本種の胃内容物の調査を行ったTORII(1986)によると、果実が全体重量の75%を占め、ビワ、ウンシュウミカン、ヤマグワが優占していたという。ハクビシンは植物食、さらに言えば果物食の哺乳類ということができるだろう。

また、ムクノキでは種子が2つに割られているものが多数発見された。筆者らは当初、ハクビシンが種子を割って食べることがあるものと解釈していたが、糞中の種子をネズミ類が二次的に食料として利用する可能性もあることに思いいたった。種子の外殻が黒ずんでいるのに、割られた内面が新鮮な色に近いこともこ

の考えを支持しているように思われる。問題の種子が糞の中から出たものか、糞の間にあったのかが決め手になるが、観察が不十分であり今後の課題としたい。

また、糞の間にかかなり多くのイチョウの内種皮(ギンナン)が発見され、その大部分は二つに割られた状態で中が食べられていた。これについても、ハクビシンによるものが、二次的にネズミ類が食べたものか、初めからネズミ類が貯食したものか、今後の観察課題としたい。なお、イチョウの場合は確実に糞中から検出した事例がなかったため、表には加えなかった。

植物では他に、少数ながらクロマツ、ササ類などの葉が認められた。これらは、噛み切って長さが一定にそろっており、餌として食べられたものと思われる。

昆虫ではアオオサマムシが圧倒的に多数を占めていた。他に比較的多かったオオヒラタデムシ、大形ゴミムシ類も地上性の昆虫であり、地上を歩きながら昆虫を捕らえる姿が想像される。他の動物では、サワガニ、ミスジマイマイが多く検出された。種類の同定はできなかったが、鳥類の羽毛も発見され、ハクビシンの食性は多岐にわたっていることが明らかになった。

今後の課題

TORII(1986)も述べているように、ハクビシンの分布変化やその由来については多くの報文があるが、その生態についての知見は十分蓄積されているとはいえない。今回報告したように、糞分析、特にため糞の調査は食性の解明に大きな情報源となると思われる。今後さらに詳しい調査を試み、食性の量的な把握、餌の供給源による行動圏の推定、餌の季節変化などについて明らかにしていきたい。また、他の場所でも同じようなため糞が見つければ地域的な比較が興味深いと思われるので、情報の提供をお願いしたい。

文 献

- 中村一恵・石原龍雄・坂本堅五・山口佳秀, 1989. 神奈川県におけるハクビシンの生息状況と同種の日本における由来について. 神奈川自然誌資料, (10): 33-42.
- 中村一恵, 1990. 神奈川県におけるハクビシンの生息状況(補遺). 神奈川自然誌資料, (11): 75-78.
- TORII, H. 1986. Food Habits of the Masked Palm Civet, *Paguma larvata* Hamilton-Smith. *J. Mamm. Soc. Japan*, 11(1・2): 39-43.
- (松本文人: 藤沢市教育文化センター・浜口哲一: 平塚市博物館)